



第2章 まちづくり支援と自治体史の編纂

坂江, 渉 ; 木村, 修二 ; 河島, 真 ; 吉川, 圭太 ; 井上, 舞 ; 前田, 結城 ; 市澤, 哲 ; 板垣, 貴志 ; 河野, 未央 ; 大槻, 守

(Citation)

歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業, 13(平成26年度事業報告書):23-36

(Issue Date)

2015-03-31

(Resource Type)

report part

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009337>



— 第2章 —

まちづくり支援と自治体史の編纂

兵庫県との連携

(1) 播磨国風土記をめぐる兵庫県教育委員会文化財課との連携事業

風土記編纂の官命がだされて1300年経ったことを期にして、2013年1月、兵庫県教育委員会文化財課により「播磨国風土記調査検討委員会」が立ち上げられた。これは、兵庫県教委のほか、県内の旧播磨国に属する市町の文化財担当職員、および大学関係者等で成り立つ組織である。風土記の基礎的研究とその普及・活用をめざすことを目的としている。要請により坂江渉がその委員長につき、そのほか地域連携センターからは古市晃、高橋明裕氏（立命館大学）が委員として参加している。初年度はプレ企画事業として、風土記の地名比定地の仮現地調査と写真撮影等がおこなわれ、昨年度から3ヶ年をかけて本格的な事業が始まった。

委員会では、坂江・古市・高橋の3名が基礎的調査研究グループをつくり、今年度も引き続き、風土記の神前郡八千軍野条、賀毛郡修布里条などの比定地の現地フィールド調査風土記1300年記念フォーラム（「石の宝殿と竜山石採石遺跡」の国史跡指定を記念も兼ねる）「播磨国風土記と石作集団」が開催され、3名のうち古市が講演をおこない、坂江と高橋がフォーラム・コーディネーターをつとめた。当日は4000名以上の市民が参加し、播磨国風土記への関心の高さをうかがわず結果となった。（文責・坂江渉）

(2) 猪名川町における多田院御家人関係文書調査

今年度から兵庫県歴史文化遺産活用活性化実行委員会を中心に、兵庫県立歴史博物館、関西大学文学部古文書室、猪名川町教育委員会、および当センターが加わって、猪名川町域に所在する旧多

田院御家人の系譜をひく家々の所蔵文書の調査を進めることとなった。

7月9日、関西大学において1回目の会合が開かれ、今年度の方針が決められた。その場で、今年度は同町槻並地区田中家の所蔵文書および上阿古谷地区仁部家の所蔵文書の調査を中心におこなうことが決まったが、とりあえず1980年代に発行された『猪名川町史』編纂時にも調査がなされ、多くの多田院御家人関係史料の所蔵が確認されている槻並田中家の所蔵文書の所在確認を兼ねた本調査を8月10～1日に槻並公民館において実施することとなった。本調査の前に8月6日、木村および町教委の担当者で同家を訪問し、土蔵に保管されていた文書群を運び出し、本調査当日まで一時的に保管する猪名川町立ふるさと館に運び入れる作業をおこなったが、このとき、これまで調査がなされていない文書が見いだされたため、結果的にはこの新出文書の整理作業が今年度の活動の中心となった。なお、本調査は台風襲来の影響で、8月10日は中止とし、翌11日だけ、会場をふるさと館に移して作業するにとどまった。その後、第2回調査は9月14～5日（木村不参加）、第3回10月19日、第4回11月16日、第5回12月7日（木村不参加）、第6回1月18日と実施され、田中家文書の新出分の整理が概ね完了した。同時にデジタル撮影もおこなっている（担当木村）。

今年度の成果は、新出文書の日録掲載を兼ねた報告書発行にまとめられるが、町民へむけた成果還元の場合として、2月3日（月）から3月1日（日）にかけて、猪名川町生涯学習センターコミュニケーション広場を会場として、小展示会を開催することとなった。展示の方針は11月調査の際に大筋の協議をおこない、1月調査の際に具体化、2月1日に現場でのディスプレイ作業が行われた。展示期間中の2月11日（1回）、15日（3回）、21日（2回）、22日（2回）には、作業にあたったメンバーによるギャラリートーク（展示解説）も実施し、毎回15名程度の参加をえた（展示パンフレットも作成）。なお1月調査の際には、上阿古谷仁部家への準備調査も実施され、今後の調査への協力要

請を同家に対しておこなった。次年度以降も調査は継続予定だが、事業経費の動向により調査規模の多寡を検討することになっている。

(文責・木村修二)

包括協定にもとづく灘区との連携事業

本年度は灘区と連携した活動はなされなかった。なお、2015年2月現在の『篠原の昔と今』(2005年度発行)の残部は約180部、『水道筋周辺地域のむかし』(2006年度)は約300部となっている。本年度も断続的な配布依頼があった。

(文責・木村修二)

神戸都市問題研究所・神戸市文書館との連携事業

公益財団法人神戸都市問題研究所・神戸市文書館との間で、2006年度から共同研究「歴史資料の公開に関する研究」を継続して行っている。主な内容は、①神戸市文書館に収集・所蔵される歴史史料の整理、調査、さらに公開、活用のための土台作り、②神戸市文書館の来館者に対するレファレンスサービス(特に古文書の解説)、③毎年秋に開催される企画展の企画と準備、の3つである。③については、本年度、11月10日(月)から23日(日・祝)まで、企画展「幻の公会堂と神戸モダニズム——未公開設計図集と昭和初期街風景」を開催した。

また、『新修神戸市史』生活編(仮題)の編集・刊行に向けての意見交換も、今年度から始まっている。

(文責・河島真)

神戸市企画調整局との震災資料をめぐる連携

2015年1月より神戸市では、神戸都市問題研究所が整理作業を進めていた阪神・淡路大震災関連公文書の公開を開始した。この神戸市の震災関連公文書の整理等については、2009年度より神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターが神戸市企画調整局企画課と共同研究を開始し、2010

年度には神戸都市問題研究所分室での整理作業に研究員を派遣し、目録作成や整理保存方法などについて専門知識の提供を行なった。

本年度は奥村弘・佐々木和子・水本有香・吉川が、コミスタこうべで開催された「阪神・淡路大震災関連文書企画展」を見学し(1月27日)、都市問題研究所主任研究員の杉本和夫氏と意見交換した。

(文責・吉川圭太)

神戸を中心とする文献資料所在確認調査

2008年度以来、故石川道子氏によって進められてきた神戸市東灘区御影の元酒造業木村家の所蔵文書について、同家との協議にもとづき、本学人文学研究科古文書室を保管場所として、2015年3月31日まで借用し、さらに双方に異議がなければ1年単位で借用延長する旨の借用書を5月13日付で作成、木村家へ届けた。(文責・木村修二)

財団法人住吉学園との連携事業

1. 『住吉歴史資料館だより』の発行

『住吉歴史資料館だより』は、5月13日に第8号が、12月15日に第9号が発行された。

専門委員による執筆分についてのみ挙げると、第8号では、木村執筆の「赤塚山からの眺望」が、第9号には松下正和氏(近大姫路大学)による「東求女塚古墳と菟原処女伝承(3)」がそれぞれ掲載された。

2. 「阪神淡路大震災と住吉」展の開催

2014年10月26日(日)、住吉歴史資料館内の座敷において、住吉地区の各小中学校生徒を対象とした合同お茶会が開催されたが、これに併せて同館2階で、「阪神淡路大震災と住吉」と題した展示会を開催した。本展示会では、昭和13年阪神大洪水の8ミリ映像の映写もおこなった。

また展示会で使用したパネルは、10月17日、18日に開催された住吉中学校文化祭でも展示している。

3. 住吉歴史資料館展示関係

同館の常設展示について、全面的な展示替えを目標に作業を進めた。これに関連して、今年度には渦が森地区で昭和9年(1934)に発見された銅鐸(現在東京国立博物館所蔵)の復元レプリカを発注((有)和銅寛製作)し、完成した。展示・保管設備を整え次第、展示する予定である。

4. 阪神淡路大震災関係聞取調査

今年度は、昨年度までに実施してきた震災聞き取り調査のデータを資料集としてまとめるべく協議を進めてきた。担当は奥村専門委員に加え佐々木和子氏(神大地域連携推進室)と水本有香氏(神戸学院大学)に助力を願って、ほぼ月1回の会合を重ねてきた。成果は、『阪神淡路大震災資料集Ⅰ』として今年度末発行を目指している。

(文責・木村修二)

大学協定にもとづく小野市との連携事業

神戸大学と小野市との間では、2005年1月26日に社会文化にかかわる連携協定(包括協定)が結ばれ、それ以来、共同事業がすすんでいる。2014年1月には、「協定更新に関する合意書」が結ばれ、協定はさらに2017年1月まで有効となった(合意書の中身については、昨年度の本事業報告書の44頁を参照)。今年度の事業内容は、以下の通りである。

(1) 小野市立好古館「平成26年度特別展(地域展)・義経の見た風景——小野市市場地区の古代・中世」展の開催協力

好古館の地域展については、平成22年度まで、小野市内の各地区の子供たちによる「調べ学習」を基軸にしたものであった。しかし23年度からやり方が変えられ、学芸員やセンター研究員・学生などが、地元入りして聞き取り調査をおこない、その成果を発表する方式になっている。昨年度までは、小野市内の下東条地区における事業がおこなわれ、今年度からは市場地区の調査が始まった。その成果の一端を公表する場として、本展示会が催された(小野市立好古館・市場地区地域づくり協議会・コミュニティセンターいちば・神戸

大学大学院人文学研究科地域連携センターの主催行事)。

またこの関連行事として、2015年1月17日、コミュニティセンターいちばにて講演会が開かれ、坂江が「播磨国風土記の時代の市場地区とその周辺の古代・中世史」と題する講演をおこなった。特別展の入場者数は、好古館での展示会が1362名、コミセンいちばでの展示会が560名で、総数1922名(昨年の下東条地区に関する展示会入場者総数は1764名)だった。また講演会の聴講者数は56名であった。

(2) 地方新聞『東播事報』『新東播』のデジタル化と記事見出しの目録作成事業

『東播事報』『新東播』という地方紙には、昭和35年～平成20年の49年の間、小野市・加東市域などで起こった出来事が数多く記録されている。また過去の小野市・加東市域における災害に関する記事を拾い出すことができる。今後の防災研究・防災計画、および地域歴史遺産の保全・活用にも資することができる貴重な資料群である。そこで本年度から、この原本資料を所蔵する小野市立好古館と連携して、科学研究費補助金・基盤研究(S)「災害文化形成を担う地域歴史資料学の確立—東日本大震災を踏まえて—」の研究を深める目的をもって、本事業に取り組むことにした。

写真撮影と目録編集作業は、人文学研究科の大学院生の山本康司氏が担当し、本年度末には、全1644号うち、第1号(昭和35年(1960)8月1日)から第761号(昭和57年(1982)12月15日)までの記事見出しの目録が、刊行・公表される予定である。

(文責・坂江渉)

連携協定にもとづく朝来市との連携事業

(1) 民間所在史料の調査・保全

① 枚田家文書

昨年度に引き続き、枚田家文書の目録作成を行った。作業は大学に文書を搬入して行った。今年度で全点の目録化が終了し、平成26年12月に『枚田家文書目録』を刊行した。また、作業の終

了に伴い、同月に、市が一時預かりしていた古文書を所蔵者に返却した。その際、目録作成を担当した三角菜緒(大学院生)が同行し、所蔵者に整理・調査にかんする報告を行った。

② 石川家文書

昨年度に引き続き、石川家文書の整理・撮影作業を実施した。また、今年度については、古文書整理サポーター養成の一環として、平成26年8月26日・27日と平成27年1月17日に、生野メインホールにおいて古文書整理会を開催した。整理会では、地域住民の方と学生が協力し、未整理文書のクリーニングと付箋つけを行った。参加者からの感想は概ね好評であり、次年度以降もこうした形で文書の整理を進めるとともに、協力者を増やしていきたい。

また、石川家の外蔵が破損したことを受け、市教委の協力のもと、外蔵にあった資史料を可能な限り搬出した。搬出した資史料については、次年度以降、少しずつ整理を進めていく予定である。

(2) 奥銀谷地域における「文化遺産を活かした地域活性化事業」への支援

昨年度より、文化庁の支援(文化芸術振興費補

特別展
**山田家文書から見た
生野の生活と文化**



昔の生野では
どんな生活をしていただろう?
新町にあった山田家からは、
昔の和本や掛け軸、絵入りの辞書や道具類
など、当時の生活を垣間見ること
のできる貴重な資料が見つかりました。
今回の特別展では、これらの資料を
展示公開いたします。
ぜひ会場にお越しいただき、当時の
生活に思いをはせてください。

平成27年
3月5日(木)~22日(日)
午前10時~午後4時
かながせの郷 会議室
兵庫県朝来市生野町新町1185

**講演会:山田家文書の書籍たち
一生野の文化を読む**

講師:井上 舞(神戸大学)
3月15日(日)13:30~
かながせの郷 多目的ホール

以下の日程で、資料の写真撮影や
クリーニングなど、古文書整理作業
を公開いたします。
3月15日(日) 15:00~16:00
3月21日(土) 13:30~16:00
かながせの郷 多目的ホール

お問い合わせ: 奥銀谷地域自治協議会 079-679-4131
主催: 奥銀谷地域自治協議会 共催: 朝来市教育委員会・神戸大学大学院人文科学研究科地域連携センター
平成26年度文化庁文化芸術振興費補助金(文化遺産を活かした地域活性化事業)

助 文化遺産を活かした地域活性化事業)を受け、朝来市生野町奥銀谷自治協議会が実施する山田家文書の整理活動を支援している。今年度についても、昨年度と同様、定期的に整理活動を行った。また、今年度の成果報告として、「特別展:山田家文書から見た生野の生活と文化」(会期:平成27年3月5日~22日、於かながせの郷会議室)を開催した。3月15日には、井上舞が講演会「山田家文書の書籍たち一生野の文化を「読む」」を行ったほか、15日と21日には古文書の整理作業の様子を公開した。次年度も引き続き整理活動の支援を行う予定である。(文責・井上舞)

丹波市との連携事業

(1) 歴史講座・古文書相談の実施

連続講座

昨年度に引き続き、6町巡回の歴史講座(以下、連続講座)を開催した。今回は全体テーマを「講座:丹波の歴史文化を知る・つなぐ」と改名したうえ、以下の日程でおこなった。

- ・2014/6/22: 山南住民センター(参加者約40名)
第1部・山南町高座神社文書目録贈呈式
※新聞取材有り
第2部・講演①池本文人「神々の事績と高座神社」
講演②山上憲太郎「5・6世紀におけるタ
ニハ・氷上郡の素描」
- ・7/19: 春日住民センター(参加者約10名)
「親子でまなぼう! たんばの歴史」
- ・10/18: 青垣住民センター(参加者数21名)
加藤明恵「柏原藩政日記を読んでみよう!」
- ・11/22: 柏原住民センター(参加者数20名)
井上舞「丹波の文化人とその交流
——田家を中心に」
- ・12/20: 氷上住民センター(参加者数22名)
前田結城「旗本佐野領の幕末維新I
——上山治郎右衛門の軌跡から」
- ・2015/1/24: ライフピアいちじま(参加者数69名)
シンポジウム「丹波の歴史文化を受け継ぐために」
基調講演・前田「いま、なぜ地域歴史文化の

継承をよびかけるのか」

活動報告・上田脩氏

パネルディスカッション・前田、奥村、井上舞、芦田

本講座の参加者からは、毎回アンケートにおいて連携事業の継承を望む意見が寄せられている。また連続での聴講の事例も多数認められる。また、本年度最大の成果は、2015年1月24日におこなわれたシンポジウム「丹波の歴史文化を受け継ぐために」であろう。この日はこれまでの連続講座で最大の参加人数となった。事例報告やパネルディスカッションに対する感想も概ね好意的なもので、地域歴史文化の継承の必要性について、参加者の意識を一定程度喚起することができたと考える。今後の事業につなげていきたい。

今年度は、調査速報的なものから、学術的に深みのあるものまで、あるいは古文書講座的なものから、親子講座的なものまで、幅を持たせたプログラムを編成した。しかしながら、体験型・参加型の形式をとった回については、参加者数があまり伸びなかった。とはいえ講義型の講座のみでは地域歴史文化の担い手形成は十全たりえないことは確かだろう。今後も根気よく続けていきたい。

(2) 丹波市内古文書調査

(カッコ内は調査日・調査者)

・自治会文書

1. 春日町朝日萩野家文書(7/19)
2. 山南町谷川清水家文書調査(7/21,10/4-5,12/27)
3. 春日町棚原区有文書調査(8/21,11/22,2/13)

本年度は、春日町朝日萩野家文書と山南町谷川清水家文書の2文書群につき新規調査をおこなった。萩野家文書は「細川春国書状」「内藤国貞書状」「赤井時家書状」など戦国期の書状を中心としており、市域の戦国期社会を知るうえで大変貴重な史料である。本年度7月、この萩野家文書が丹波市に寄贈されることとなった。受け取りに際して、あらためて内容を確認させていただいた。現在は春日歴史民俗資料館に所蔵されている。

また、清水家文書は、近世から近現代にかけての大量の文書群であり、現在目録を作成中である。近世清水家は、宮大工として名を馳せており、

近隣の高座神社の鳥居・末社の造営にも関わっている。前年度調査した高座神社文書とあわせて活用し、地元で小講演のようなものを企画するのもよいかと考える。また、近現代では、久下村助役等を務めた清水正巳氏の日記群が大変貴重かと思われる。明治後期から昭和戦前期までを連続的に捉えることができる史料であり、今後解読作業を進めていくつもりである。

(3) 研究成果物の発表

① 「丹波市オンデマンド史料叢書」の刊行開始

今年度は第一弾として、柏原歴史民俗資料館所蔵柏原藩政文書より「天保十四癸卯年日記」を翻刻し、これをPDFファイル化して市教委ウェブページ上に掲載した。今後も、同館所蔵文書を中心に、市域全体の歴史に関わる史料を優先的に翻刻・アップしていく予定である。

② 広報たんばへのコラム寄稿

昨年度に引き続き、市広報誌『広報たんば』に毎月古文書調査・研究結果を市民向けのコラムとして発表した。

③ 目録・史料翻刻

柏原歴史民俗資料館蔵上山家文書4-27「大阪御舟手御役所并役向書状下案控」

④ その他

2006(平成18)年2月から連携協力を続けている春日町棚原自治会パワーアップ事業推進委員会より『棚原の歴史と神社仏閣』が2014年11月に刊行された。本書では、神戸大学との共同研究の成果も踏まえられている。大学としての直接の成果物ではないが、「地域歴史文化の担い手の育成」を目的の一つとする本事業の趣旨に鑑みれば、これもある意味で成果の一つといってよいだろう。

(文責・前田結城)

(4) 丹波古文書倶楽部への協力

今年度も丹波市内の住民センターを会場に例会が開催され、木村がチューターを務めた。なお、8月9日開催予定だった例会は、台風11号の影響により2月に延期となった。また、7月12日と12月13日の例会の後には、同市内においてフィールドワークが開催され、木村および松下正和氏(近

大姫路大学)がアドバイザーとして参加した。

(文責・木村修二)

連携協定にもとづく加西市との共同事業

加西市と神戸大学との連携協定は、2009年5月16日に締結された。これにもとづき、本年度はつぎのような事業をおこなった。

(1) 青野原俘虜収容所関連資料の調査研究

第1次世界大戦中の独・墺捕虜が撮影したと思われる写真資料の調査研究は、これまで小野市好古館との事業の中ですすめられてきた。しかし2012年度からは、加西市立図書館郷土資料係(担当・萩原康仁氏)との共同調査作業が始まりだした。第一次世界大戦の開戦の100周年にあたる今年度は、その成果を公表するため、2014年4月に西洋史学の天津留厚教授をリーダーとする実行委員会を立ち上げ、つぎの国際的な企画を開催した。

①2014年10月30日(神戸大学六甲ホールにて)オーストリア大使館・神戸大学・加西市・EUIJ関西共同事業「第一次世界大戦100年と青野原捕虜収容所——箱庭の中央ヨーロッパ」展のオープニングセレモニーの開催(神戸大学主催行事)

1914年に亡くなった女性初のノーベル平和賞受賞者のベルタ・フォン・ズットナーの生涯を描いたMaxi Blaha氏による一人劇／市民・学生を含めた160名の入場者を得た。



②2014年11月12日(神戸大学出光佐三記念六甲台講堂にて)オーストリア大使館・神戸大学・加西市・EUIJ関西共同事業「第一次世界大戦100年と青野原捕虜収容所——箱庭の中央ヨーロッ

パ]展の記念コンサート(神戸大学主催行事)

青野原収容所の捕虜たちが演奏した曲目にした神戸大学交響楽団とウィーンからのソリスト・ウルリケ・ダンホーファー教授との共演／市民・学生を含めた約200名の入場者を得た。



③2014年11月10日～11月28日(神戸大学百年記念館1階展示ホールにて)オーストリア大使館・神戸大学・加西市・EUIJ関西共同事業「第一次世界大戦100年と青野原捕虜収容所——箱庭の中央ヨーロッパ」展示会(神戸大学主催行事)

青野原収容所の捕虜たちの収容所生活や近隣住民との交流を語る歴史資料、写真などを展示し、これまでの研究成果を公表した(展示会図録の編集は石井大輔氏が担当した)。期間中の見学者は、市民・学生などを含め合わせて250名近くだった。

④2015年2月1日～2月20日(加西市立図書館内にて)「100年前の加西と第一次世界大戦」展示会(加西市立図書館主催・神戸大学共催・在日オーストリア大使館協力行事)

展示期間中の2月7日には、天津留厚教授が、「世界の中の青野原」と題する記念講演を、加西市のアステアかさい・多目的ホールでおこなった。

(2) 加西市野上町における「野上町歴史遺産調査事業」

2012年、加西市教育委員会の森幸三氏より連絡が入り、野上町内の旧寺の襖の下張り文書の剥離・整理作業についての協力要請があった。これを受けて、2013年度から正式に「野上町歴史遺産調査事業」が事業化された。野上町文化財保存会のメンバーとともに、坂江・小野塚航一(大学院生)・加藤明恵(大学院生)・板垣貴志(特命講師)らが、野上町の区有文書の古文書や絵図の分析を

おこない、その成果をブックレット（ハンドブック版）にまとめることになった。3月末に完成する予定で、4月以降、そのブックレットを活用した3世代町内歴史遺産ウォーキングが開かれる予定である。

(3) 加西市の文化財審議協力

センター研究員の坂江渉が、2012年10月1日付けで「加西市文化財審議委員」に任じられ、加西市の文化財行政の審議に協力した。

(4) 播磨国風土記の地名比定地の共同調査

昨年度に引き続き、兵庫県の播磨国風土記調査検討委員会の調査活動の一環として、加西市立図書館の郷土資料係の萩原康仁氏とともに、播磨国風土記の賀毛郡修布里条の地名起源説話に出てくる「修布の井戸」をめぐる聞き取り調査、比定地の吸谷町と福崎町八千種の余田地区とを結ぶ峠道、通称「弥勒坂」（吸谷道とも）の踏査調査などを実施した。（文責・坂江渉）

尼崎市における連携事業

尼崎市の新市史の編集委員として、全体の編集と中世部分の執筆を行った。（文責・市澤哲）

三木市での連携事業

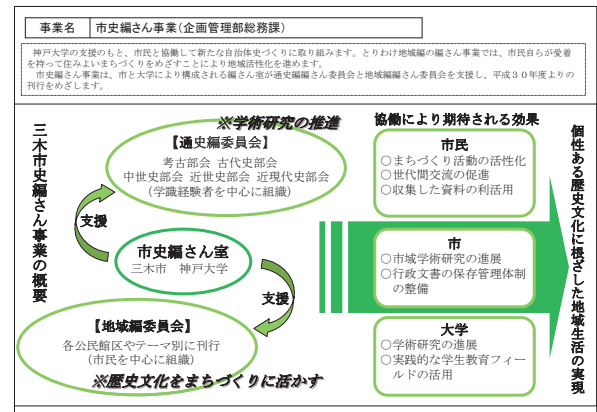
(1) 三木市史編纂事業支援

昨年度より、新修三木市史作成に向け企画管理部総務課との協議をおこない、市史編纂の指針作成し具体的支援を進めてきた。本年度は、三木市役所内に市史準備室を設け、特命教員を派遣した。5月中に兵庫県内の近隣自治体（小野市、加西市、明石市、神戸市、尼崎市）の市史編纂関係部署を、挨拶を兼ねて視察し、10月中には先駆的な編纂事業として、飯田市歴史研究所、松本市文書館、長岡市立図書館文書資料室を視察した。これらの県内外の視察を踏まえて、11月末に三木市へ市史編纂事業に向けた提言書を提出した。

市史編纂に向けての啓発としては、7月11日に職員向け研究会を、12月から3月にかけて市内4ヶ

所の公民館（三木南交流センター、中央公民館、志染公民館、緑が丘公民館）にて講演会を開催した。

このほか、10月4日から11月30日にかけて小河家文書展を開催し、展示内容を作成した。また、3月15日には、三木市歴史講演会にて講演し、座談会を開催した。



(2) 観光振興課との連携事業

2010年度より、文化庁の地域伝統文化総合活性化事業（「三木市文化遺産活用・活性化事業～三木市文化遺産再発見によるまちづくり～」）が開始され、今年度も三木市観光振興課の担当者および三木市観光協会の職員と協議を重ね、事業を展開した。旧玉置家住宅を活動拠点に、玉置家に保存されていた文書群（古文書・書籍）の整理を進めている市民グループの活動を支援した。

今年度は、昨年度に引き続き三木市の歴史文化に関わる4回の古文書講座（第13回～第16回）をおこなった。連続講座では、崩し字を学びつつも、三木市域の歴史やその時代的背景の説明を重視する方針で進めたことが特徴でおおむね好評であった。本年度は、玉置家文書目録を下巻として刊行した。

また、昨年度に引き続き冬期古文書合宿（2月22日～23日）を三木市でおこない、旧玉置家住宅での歴史文化を活かしたまちづくり活動が学生教育の教材となった。（文責・板垣貴志）

三田市との連携事業

(1) 自治体史フォーラム

昨年度の報告書でも予告しておいたが、2014年3月15日(土)午前11時から午後4時30分まで、三田市と神戸大学大学院人文学研究科の共催で「自治体史フォーラム in さんだ」を開催した。この催しは、①自治体史編さんの意義について自治体、研究者、利用者の立場から実務的・体験的に課題を提示する、②自治体史に対する期待や希望について、会場参加者を交えながら意見交換をおこない、今後の編さんのあり方に対する展望を見出す、③各地で編さんされた自治体史や地域史に関わる書籍・資料の展示、頒布の場を設け、地域史研究に関する情報交換の場とする、を趣旨とするもので、内容は書籍展示(自治体史と地域史料の見本市)、基調報告、パネルディスカッションの3部から成った。当日は、三田市立図書館(市史担当)印藤昭一氏、神戸新聞記者仲井雅史氏、地域連携センター事業責任者奥村弘の3人が基調報告を行い、その後パネルディスカッションが行われた。

三田市との間ではこのほか、今年度後半に、旧三田藩主・九鬼家に関する新出史料の整理が依頼され、作業を進めているところである。

(文責・河島真)

(2) 旧三田藩主九鬼家資料の総合調査

本年度は、旧藩主九鬼家から三田市に預けられた旧藩主九鬼家資料の総合調査を開始した。史料の内容はおおよそ二分される。一つは近世初期、九鬼家の鳥羽時代に関するもの。もう一つは幕末から近現代を中心とした三田藩政関係や九鬼家の家政に関するものである。九鬼藩主家の史料はこれまで、1929(昭和4)年の阪神大水害で被災し、存在しないとされてきた。よって刊行済みの三田市史には利用されることがなかったが、今回現当主からの連絡があり、史料の存在が明らかとなった。

近世初期の史料群については、2015年2月6日(金)、三田市役所にて奥村弘、市澤哲、村井良介、

前田結城に京都大学名誉教授藤井譲治氏を加えて史料の実見をおこなった。職豊期の大名権力や幕政初期の藩政史を研究するうえで貴重な史料が豊富に含まれていることが確認された。加えて藤井氏より、文書群を一括して文化財指定してはどうか、などの助言を得た。

また、近現代の史料群については、3月に前田と学生数人によって整理・目録作成作業をおこなった。幕末・明治初年の政治史に新たな光を当てる史料が多量に含まれており、これらについても今後分析作業を進めていく必要がある。

(文責・前田結城)

篠山市での連携事業

本年度は、篠山市立中央図書館と連携して、篠山市立中央図書館に収蔵されている地域史料の整理サポーター活動を、自主的な市民活動として本格的に始動した。本年度は合併町村から引き継がれた丹南町史編さん資料の目録化作業を行った。それにともない10月26日には、旧丹南町での町史編さん事業関係者を招き、神戸大学文学部の学生も交えて座談会を開催した。次年度以降も、定期的に図書館を訪問し自主的な活動を支援する予定となっている。

また、夏期古文書合宿(9月8日～10日)も篠山市で開催し、中西家文書の整理作業を行った。

(文責・板垣貴志)



明石市との連携事業

明石市との連携事業は、厳密には2つの異なる業務からなる。一つは、平成22年度より継続している「明石藩関連資料調査・公開業務委託」、もう一つは、本年度よりスタートした新・明石市史編纂事業にかかわる一連の業務である。

(1) 「明石藩関連資料調査・公開業務委託」

(平成26年度)

① 資料調査

・黒田家文書（明石市受蔵分）

旧明石藩士・黒田家文書における黒田長保「日記」の翻刻作業を本業務の中で進めている（担当前田結城）。今年度は、「日記」（慶応4年）（43）分を完了し、「仮日記」（明治2年）（44）を7割方解説した。

なお、12月26日に発行された『LINK』第6号誌上に、前田の編著によって慶応元年日記後半部の史料紹介が掲載された。

また目録作成も継続している。

・黒田家文書（神大購入分）

目録作成は未了。昨年度報告書で触れていないものとしては、書状類が大半を占める中、黒田家当主の履歴に関わる史料が見いだされたのが注目される。これは、次年度の展示会に出品する可能性も含めて今後さらなる調査を進める方針である。

・松平家旧蔵文書

静岡県在住の松平家より新たに文書が見いだされた。中心となるのは歴代当主の任官に際して発給された口宣案と、領地目録と将軍家発給の朱印状である。残念ながら領地目録と朱印状は、写本だが貴重であることには変わりなく、これも次年度の展示に反映できればと考えている。

② 調査研究成果

・「明石藩の世界Ⅱ」展への参画

本年9月13日（土）から10月13日（月・祝）まで、明石市立文化博物館において、「明石藩の世界Ⅱ」と題する展示会が開催された。本展は、昨年度よ

り開催されている「明石藩の世界」展の第2回目という位置づけであり、サブタイトルを「藩士の日常」とした。

昨年度同様、明石市と明石文化博物館と神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターが主催となったが、神大は主に展示の立案・構成を担当した。

今回の展示では、衣食住を中心とする藩士の日常生活を、黒田家文書および美濃部家文書（明石文化博物館所蔵）、速水家文書（同家蔵）、そして松平家文書の中から選んで展示した。また、黒田家資料に含まれていた絵双六を中心に「遊び」をテーマにした展示もおこなった（文博学芸員・釜須朱美氏担当）。

本年度の展示会でも、展示図録が製作され、その本文執筆も一部を除いて神大側が行なった。解説論文のタイトルは、以下の通りである（掲載順）。

木村修二「明石藩士の日常生活をめぐって」

前田結城「幕末明石藩士における〈移動〉の諸相」

また、絵双六の解説を、同資料に詳しい研究者である山本正勝氏に依頼し特別寄稿していただいた。

その他、図録では図版解説、史料翻刻なども当センターが執筆担当した。

展示会期間中は、センター研究員（木村）によるギャラリートークを積極的に実施した。期間中17日、多い日には10:30、13:30、15:30の3回おこなった（およそ30回程度）。展示会観覧者（入館者）は期間中2536名（博物館調べ）であった。

9月28日には、記念講演会が開催され、前田が講演を担当した（「幕末明石藩士における《移動》の諸相——黒田家文書「日記」を素材に」）。参加者数78名。講演会終了後には、講演参加者の有志を対象に展示会場でのギャラリートークも実施し、木村、前田結城、橋本氏がそれぞれの担当コーナーにおいて解説をおこなった。

また、本展との連携イベントとして、10月4日に同館において「シンポジウム『明石城を復元する』」が開催され、パネラーの位置として木村が参加し、「藩士屋敷の空間構成について」と題し

た講演をおこなった。

(2) 明石市史関連

① 新・明石市史の編纂体制と協議

本年度より始まった新・明石市史編纂事業は、刊行計画については現時点で未知数な部分も多く、したがって本年度は体制の枠組みを整えることに重点が置かれ、具体的な調査などは、従来の成果蓄積のある考古編などを除いては、まだようやく着手された段階である。

現時点での編纂体制の大枠は、まず市史編さん委員会をトップに据えて、その下位に、自然、考古、古代、中世、近世、近代、現代といった時代や分野毎の専門部会からなる市史編さん専門部会が位置づけられ、さらに市史編さん協力委員会として後述の地域編さん部会（以下「地域部会」）が位置づけられている。そして新たに設置された市史編さん室が、史資料の整理や各部会メンバーへの提供といったサポートをおこなうが、当面の会計事務的なとりまとめは明石市教育委員会文化振興課文化財係が担う。このうち、各専門部会の活動については、各部長を中心にメンバーが招集され、適宜会合や調査が行われるが、原則として当センター業務との直接的な関係性はないというのが筋なので、文責者木村が属する近世部会を含め本報告書での報告は原則おこなわない予定である。

ただ、後述の地域部会を含め、各部会の部長が活動の進展具合を確認し、情報交換する場としての編さん専門部会の会合が年に3回程度開催されるので、この点については報告しておく必要があるだろう。本年度1回目の会合は、7月5日に開催された。最初の編さん専門部会とあって部長に選任された人から編さん体制についての確認が念入りに行われた。2回目は12月20日に開催された。各部会の調査状況の報告と、編さん室の史資料整理状況の報告がなされ、予算執行に関する協議がなされた。3回目は、2月21日に開催された。やはり各部会と編さん室の報告が中心だったが、前回からおよそ2ヶ月した経過していないことから、大きな進展はみられなかった。予算執

行見込みと今後の予定が文化財課から報告があり、終了した。

② 「明石市における地域史料の調査研究業務委託」（平成26年度）

地域部会に関しては、明石市より市史編纂事業との明確な関連性のもとに、別途当センターへの事業委託（「明石市における地域史料の調査研究業務委託」）もなされているので、ここではその点について、簡単に触れておく。

地域部会の当面の活動は、大きく分けて(a)地域文化財普及・活用事業と(b)文化遺産を活かした地域活性化事業とからなる。

(a)では「あかし文化遺産集成」冊子の発行へ向けた取り組みが主たる活動で、市史編さん関係者以外の市史編さん協力委員がこのプロジェクトに参加することになっている。また(b)は、現在の市内各地区の民俗や水利を調査することを基本としているが、歴史的な視点も当然含まれるため、古文書などの解説がかかせない。ここに各時代、とりわけ近世や近代の部会との方法的な重なり合いが生じるが、この点をクリアーするため当センターが各部会との連携のもとに地域部会の中での文献資料調査を進めることを前記委託事業の目的としている。具体的には、近世部会にも属する木村が当センター担当者としてこの事業を担うことで目的を果たすことを目指すものである。

ただしこの点に関しては、今年度は全体的な編さん体制の整備の遅れのなかで地域部会関係者と木村との関係構築にも時間がかかったこと、また明石市域の文書所在情報をほぼゼロの状態から収集してゆかねばならなかったことから大きな成果はあげ得なかった。したがってなおも後者の作業を続ける必要があるが、年度末になり福里地区や大久保地区の個人宅の所蔵文書などの準備調査を実施する目途が立つまでにいたったので、次年度以降は本調査も含め進展するものと考えている。

なお課題としては、文化財係や編さん室を含めた市史編さんに関わる関係者の間で、地域の自治会や個人蔵の文献資料の調査方法や貸借の作法、そもそも古文書の取り扱いについての方法などに

ついでに認識が共有されておらず、たとえば未調査（未整理）文書群からの一部古文書の抜き取り行為や借用書を所蔵者に預けないまま文書を借り出すという事態が発生した。芸風の違いこそあれ文書調査にあたって現状記録方式の導入がかなり一般化している現在の文書調査水準を意識した調査を進めることとともに、少なくとも最前線で地域文献資料に接する関係者間で、上記の方法論を共有するためのシステムを早急に構築する必要があるが、次年度の重点課題の一つにしたい。

（文責・木村修二）

たつの市との連携事業

たつの市との間では、旧新宮町時代の『播磨新宮町史』史料編Ⅰ古代・中世・近世（2005年刊）の編纂事業以来、密接な連携関係を保っている。今年度の事業は、以下のとおりだった。

（文責・坂江渉）

（1）神戸大学近世地域史研究会

地域連携センターでは、平成14（2002）年度から新宮町（現たつの市新宮町）と「兵庫県新宮町における地域資源としての歴史文化遺産の調査および成果の刊行」と題する共同研究を開始し、平成17年9月に『播磨新宮町史』史料編Ⅰ、その後引き続き近代編等を成果としてまとめ、刊行した。さらに刊行後、史料編の編纂にたずさわった近世史部会メンバーのうちの有志が、史料編Ⅰに掲載できなかった史料に関する調査・研究を継続して進めるべく、平成18年（2006）に同研究会を立ち上げた。

現在の研究会のメンバーは、市民の方々が中心で、兵庫県たつの市、姫路市、加古川市、神戸市、芦屋市、尼崎市、大阪府吹田市などの各地から月1回神戸大学に集い、古文書の翻刻を行っている。その成果として、『播磨新宮池田家史料の紹介』『「観聞記」の世界（一）——播磨国からみる江戸時代』としてまとめてきた。本年度は引き続き『「観聞記」の世界（二）——播磨国からみる江戸時代』を刊行した。いずれの刊行物もメンバー自らが翻

刻文、註釈を作成しているほか、それぞれが調査を進めた研究成果を論文あるいはコラムとして掲載している。また刊行物の編集もメンバーによるものである。なお、研究会については、学生・院生等若い世代を呼び込むのが目下の課題である。

研究会では、フィールドワークも実施しており、1年ないし半年に一度、翻刻テキストに表れる播磨の各所を訪れている。本年度については、11月に研究会有志でたつの市龍野町城下のフィールドワークを実施した。そのさいに訪れた某寺で近世～近代の古文書が未整理のまま所蔵されているのを知り、メンバーと御住職とで協議した結果、今後の同寺で古文書の保存・管理を行いやすいよう古文書整理（写真撮影・目録採取）を実施することとなった。本年度については、平成27年（2015）1/13・14、2/10・11、3/30・31の計6日間にわたって整理・調査を実施した。古文書目録及び写真データは、同寺とともに、地域連携センター及びたつの市教育委員会に提出する予定である。また、同寺文書の整理が終了した際には、その一部を研究会の翻刻テキストとし、活用することを検討している。

（2）市民と大学が創る歴史ひも解き事業

平成23年（2011）5月、たつの市指定文化財である龍野藩西組大庄屋八瀬家住宅（指定名称：郷目付八瀬家）が台風の被害に見舞われた。破れた仏間の襖から下張り古文書が発見され、そのなかには当時の村方における重要史料である年貢免状が発見された。たつの市からの依頼を受け、大規模自然災害から歴史資料を守るボランティア団体である歴史資料ネットワーク（以下、史料ネット）が被災史料の保全にあたった。平成24（2012）年度より、たつの市は襖下張り文書の適切な保存及び活用のため「市民と大学が創る歴史ひも解き事業」を計画、『播磨新宮町史』編纂時から連携関係にあったセンター、さらに史料ネット副代表松下正和氏が所属する近大姫路大学とが協力して実施することとなった。

同事業では、公募で募った市民の方々とともに襖下張り文書はがし作業を行い、さらにその下張

り文書を活用して古文書講座を実施した。市民受講生は「たつの史探訪会」として活動、個々に研究を進めた。24・25年度は、八瀬家住宅の特別公開にあわせ、同事業の成果報告としてのミニ展示を実施、また年度末には歴史講演会を開催、いずれもセンターから坂江渉が報告した。本年度は事業成果を『たつの史ブックレット たつの史研究』としてまとめ、さらに平成27年2月22日に成果報告としてシンポジウムを実施した（於たつの市埋蔵文化財センター）。シンポジウムでは市民の方々4名がブックレットに寄せた文章をもとに報告、その後会場も交えての意見交換が行われたほか、たつの市域での古文書会・研究会の活動事例が紹介された。

同事業については、古文書の保全、調査（読解）、研究までの一連の「歴史研究」の流れを、市民の方々自らが実施しただけでなく、市域での地道な市民の方々の活動を相互に結びつける役割を果たしたという点で、大きな成果を得ることができたものと評価しうる。（文責・河野未央）



高砂市への協力

センタースタッフの坂江渉が2011年5月1日付で「高砂市文化財審議委員会委員」に任命され、今年度も市の文化財行政および文化財指定等について審議した。（文責・坂江渉）

淡路市への協力

(1) 台風19号被害調査

10月13日に台風19号が通過した洲本市付近で、被害が出たとの報道があり、翌日淡路市教育委員会に問い合わせた。指定文化財には被害はなかったが、市内の川が増水し、その地域を中心に床上・床下被害が200軒程度あったため、同月21日に坂江渉・吉川圭太・板垣貴志が巡見調査をした。その結果、家屋の被害も軽微であり歴史資料の被害はないと判断した。（文責・板垣貴志）

(2) 濱岡家歴史資料の調査保全

2015年1月4日、奥村弘・大国正美氏（神戸深江生活文化史料館）・三村昌司氏（東京未来大学）が、淡路市の濱岡家資料の調査を実施した。また、3月27日に科研S研究グループの協力を得て同家資料の再調査・保全作業を実施する予定である。（文責・吉川圭太）

香寺町での連携事業

(1) 香寺町史を読む会

第5次となるこの会を、昨年度に引続き前田結城と大槻が交代でかつ隔月開催というスケジュールで進めた。前田は「明治期の香寺」を、大槻は「八徳山の歴史」をテーマとし、地域に即しながら町史の理解を深める史料を取り入れながら講読した。参加者は毎回20人前後あり、終了後には自由な質疑応答が飛び交い、活発な会であった。

(2) 第3回フォーラム「大字誌をつくる」

2月19日（木）、香寺公民館多目的ホールで開催された。主催は香寺歴史研究会、共催は当センターである。

フォーラムは大字誌の編さんを支援するものであり、2011、2013と隔年に開かれて、本年度は第3回となる。参加者は47人、内研究会員外の自治会関係者が15人あったことは関心の高まりを示すものとして注目しておきたい。当日のプログラムは次の通りであった。

講演：大村敬通（高砂市文化財審議委員）「小野市立好古館の地域展」

報告：小原康彦（土師）「『ふるさと土師』を編集して」／中安清行（中屋）「大字史『中屋』の編集について」／神崎茂樹（行重）「行重なつかしの写真&資料展を開催して」

コメント：高田知和（東京国際大准教授）

報告は発刊間近の土師、原稿作成中の中屋、地域調べを始めたばかりの行重と三者三様で、町域内での大字誌の進行状況を示すかのように変化に富んだものであった。内容はそれぞれに具体的な編さん過程や課題が語られ、全体討議でもこの点で質問や意見が交わされた。

コメントでは、大字誌に決まりきったつくり方はない、作る地区や人によって大切だと思うこと、面白いと思うことを書けばいいのではないかとという感想と助言があった。

(3) 大字誌と資料展への協力

編さん途上の中屋と田野町地区からは意見を求められ、今年度刊行の土師地区では積極的に編集委員会に出席して協力した。

土師の大字誌は、「いま」と「むかし」を比較し、その変化を記録や記憶を基に記述して、二百数十頁の充実した内容となっている。ことに、村の共同体を支えてきた新旧各種団体の活動や墓碑などから探った村の先覚者列伝、屋号から見た村の生業など、他に例のないユニークな内容を取上げていることに注目したい。

資料展は昨年3月の岩部に続くもので、「行重・なつかしの写真&資料展」と銘打って、8月16（土）～17日（日）に行重集落センターで開かれた。写真は昭和10年代のものが中心で写真の前では会話が弾む様子が見られた。史料は岩田二郎家文書から特に村の暮らしにかかわるものが選択されており、17日に大槻からその解説を行った。来場者は141人で、香寺町域外からもあり、アンケートのよると好評であったという。

(4) 町史史料の保存と活用をめぐる問題

古文書入門講座は現在受講生7人で町史史料を教材に学習を進めている。一方、町史編さん時代

から続く古文書クラブが数年間の活動成果として『八徳山八葉寺文書集』を刊行したことも特記しておきたい。

町史史料の保存問題は今年も依然として解決しないままである。奥村・佐々木両氏と市教育長を訪問して要望したが何等進展はみられなかった。地元連合自治会など諸団体とも保存問題で協議を続けている。

なお香寺町史研究室は、香寺町犬飼自治会の好意で同会公民館別館を借用し連携センターのサテライト的役割を果たしながら、香寺歴史研究会と連携して活動している。

（文責・大槻守、前田結城）

佐用町との連携事業

佐用町（教育委員会文化財担当者・藤木透氏）との間では、2010年度から本格的な連携事業が始まった。今年度は、「佐用町文化遺産再発見活性化事業」（文化庁・文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業）にもとづき作成刊行した成果物（2013年3月刊行）、市民向けの啓発冊子『わたしたちの文化遺産 - 資料保存ガイド -』の普及活動に取り組んだ。また当事業後の佐用町におけるまちづくり事業の成果と課題について、藤木透氏によって、2015年1月の地域連携協議会において報告していただいた。さらに2015年2月、藤木氏から協力要請がセンター宛てに入り、来年度以降、同町内の中世の山城「利神城」の調査・活用事業に協力する方向になった。（文責・坂江渉）

福崎町との連携事業

(1) 松岡家関連の史料調査

昨年度に引き続き、柳田國男をはじめとする松岡兄弟の事績の調査・研究を行った。今年度については、長兄の松岡鼎にかんする研究を進め、平成26年5月28日～30日に高寄十郎・前田由希子（いずれも福崎町教育委員会）とともに、千葉にある旧松岡鼎宅に保管された写真資料の調査を行っ

た。写真資料については後日福崎町が借用し、10月から2月にかけて、デジタルデータ化作業と目録化作業を行った。また、資料を返却するにあたっては、中性紙封筒への移し替えを行い、資料が長期保存できるようにつとめた。

(2) 三木家資料の整理と研究

大庄屋三木家文書について、山崎善弘(奈良教育大学)の協力を得て、調査・分析を行った。今年度は、土地の開発にかんする文書と、家の経営に関する文書について、調査・撮影・分析を行った。

(3) 『播磨国風土記』の研究

昨年度に引き続き、『播磨国風土記』関連地域の聞き取り調査・フィールドワークを実施した。今年度は、加西と福崎をつなぐ道に着目し、この周辺地域の調査を重点的に行った。調査に際しては学内から坂江渉、古市晃、井上舞が参加したほか、学外から井上勝博(武庫川女子大学)・高橋明裕(立命館大学)の協力を得た。

(4) 古文書講座の開講

昨年度に引き続き、平成27年1月24日・25日に、神崎郡歴史民俗資料館において古文書講座を開講した。講師は木村修二が担当した。今年度は昨年度末に調査した、町内の区有文書をテキストに用いた。本講座は、「古文書講座」と銘打っているが、実施日が2日間しかないため、くずし字を読むというよりは、古文書からどのように地域の歴史がわかるかを解説するような形式をとった。講座は概ね好評であり、次年度以降も継続予定である。

(5) 連続講座

2014年9月13日、毎年福崎町が歴史民俗資料館において実施している連続講座において、連携事業成果還元の一環として、井上舞が「神積寺の縁起と歴史」と題する講演を行った。

(6) その他

(1)～(4)の成果については、福崎町の広報紙『広報ふくさき』上で随時成果報告を行ったほか、歴史民俗資料館平氏絵26年度企画展「ふるさと再発見！～歴史遺産は今昔をつなぐ～」(会期：平成27年3月1日～31日)において、成果を還元した。また、各活動の概要や成果については、『福崎町

連携事業平成26年度報告書』に掲載した。

(文責・井上舞)

猪名川町における連携活動

昨年度末(2014年2～3月)に、猪名川町中央公民館において全4回開催の古文書講座が開催され、講師に木村が招かれたことが機縁となり、今年度は月1回の歴史講座として古文書講座が開催されることになった(毎月第3土曜、4月・8月は休会)。テキストは専ら猪名川町域の古文書を使用するため、同館の協力を得て、町内各地の文書の調査・撮影作業も、講座当日の午後を利用して併せて実施してきた。本講座は、次年度も継続予定である。

(文責・木村修二)

— 第3章 —

被災資料と歴史資料の保全・活用事業

歴史資料ネットワークへの協力・支援

(1) 災害対応関連

今年度は、10月13日に台風19号が通過した洲本市付近で、被害が出たとの報道があり、翌日淡路市教育委員会に問い合わせた。指定文化財には被害はなかったが、市内の川が増水し、その地域を中心に床上・床下被害が200軒程度あったため、同月21日に巡見調査をした。その結果、家屋の被害も軽微であり歴史資料の被害はないと判断した。

今後とも、生活復興と密接な関連をもつ資料保全の意義についての提起などを史料ネットとも協力しながらおこなっていききたい。

(文責・板垣貴志)

(2) 全国史料ネット研究交流会

歴史資料ネットワークと独立行政法人国立文化